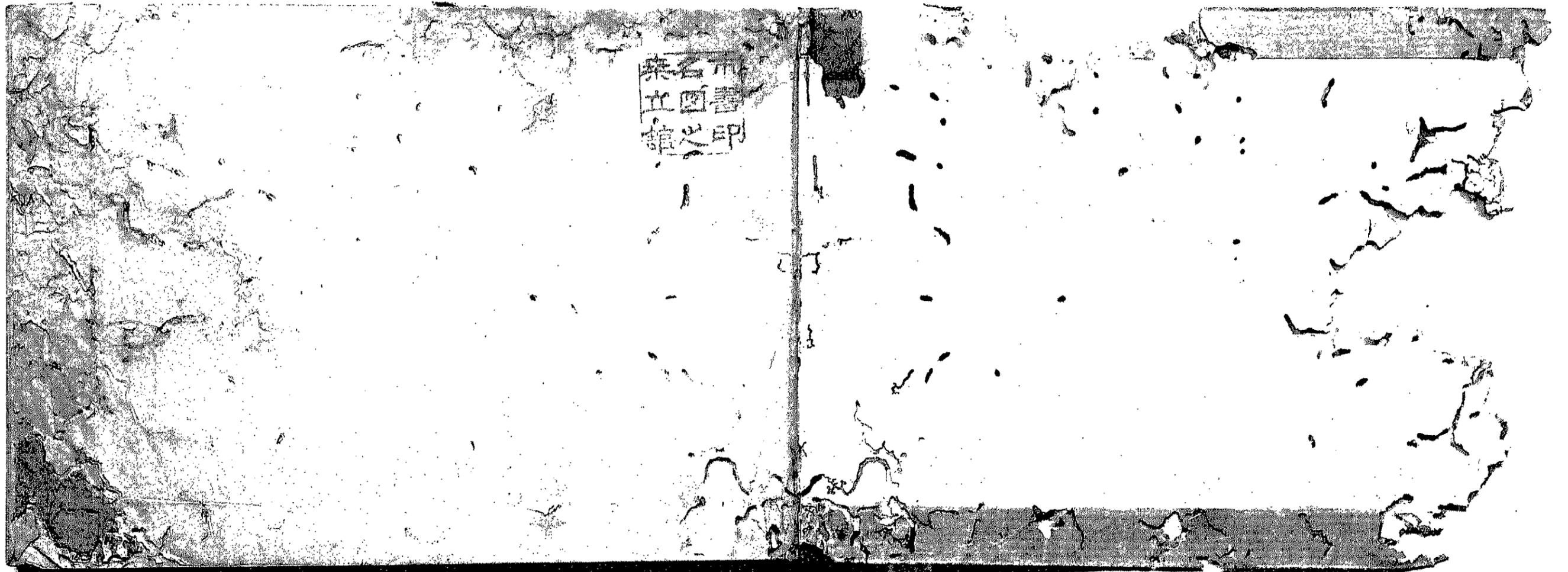




伊藤文庫  
- 384



市書印  
立館

公事方佛書對留

元文九年四月  
一 村方名を以て之者方々相止其公事扱日殺事

寛保三年十月  
一 格門方支配之令眼出入事

享和元年四月  
一 各所仕置重追放之者中追放二十分事

延享四年二月  
一 盜賊仕置事并右所権樂所及口上賣書

享和四年二月  
一 被相止ノ科之慘重之入書追放之伺事

享和四年三月  
一 入牢之者之在牢不付仕置斗方之候付伺

享和四年四月  
一 重汚役ノ家来仕置之候其之入差扣候伺

享和四年五月  
一 武家ノ家来ノ子抵為負以候仕置事

享和四年六月  
一 江戸御所構場ノ事

寛保三年二月  
一 火附仕置事

寛保三年三月  
一 盜入仕置被仕置向後仕置事一伺事

十一 由任重下知相府外共由定書速小候公事  
由下知不相府内之由定書之引合存書之由  
下中上事

十二 公事由知相府諸預事詮議日教不相掛亦可  
抄事

十三 公事由知相府諸預事詮議日教不相掛亦可  
抄事

十四 公事由知相府諸預事詮議日教不相掛亦可  
抄事

十五 黃紙認方之事

十六 女市仕匠重返放之可中事

十七 父之科之遠増之 信付拾之歳以下之由預  
内之遠増之免之候預之遠之由法事之由  
扱之由之由預之由事

十八 主人之妻是候之由之由者仕匠由定書之由事

十九 一下之人可相候者之由之由候之可伺事

二十 公事由知相府諸預事詮議日教不相掛亦可  
抄事

二十一 黃紙認方之事

二十二 府掛之公事由知相府諸預事詮議日教不相掛亦可  
抄事

二十三 公事由知相府諸預事詮議日教不相掛亦可  
抄事

二十四 例之相伺之由中候并評議之伺之由之由何候  
評議之伺之由中候書之由之由事

二十五 盜賊節防法度之相伺且由仕匠不用教  
或之人候中中候并評議之伺之由之由何候  
風軍為業辨狀一覽之吟候之由之由何候  
評議之由之由何候之可相伺事

二十六 抄事書之由之由何候之由之由何候  
可用事

寶曆十三年四月

世一 公事出入裁料日百石御座二防事共公事  
以味十二月不保原田備三事

寶曆十三年四月

世二 毎月公事必保原田書二卷事

寶曆十三年四月

世三 盜劫と不存出所不相乳並互誰人相成  
この由指三事

寶曆十三年四月

世四 仕置伺事等と少一而有る多例を相伺  
以外諸定消少旅相成出方公附二事

寶曆十三年四月

世五 上総國殿甚村と友連の同國富田并連部  
人殺入一件、并殺入仕置重、依る事  
殺不足相合と可有る旨事

寶曆十三年七月

世六 武家と家來貨通帳下取付債金貨物  
紛失物並遺入、並取又取、其差別並互  
誰人相成と通仕置二事

寶曆十三年九月

世七 上総國刑部村七年貨物と方田恩、不指  
市谷三事

明和九年

世八 田畑山林土入格別代と尋、容易地改  
三事、并地不境三事、及び口端埋事  
一、改傷は諸部外、其是口端、此は律  
丈、外中対地所、此は別原積土、不指事

同年三月

世九 入事、成後諸部、此は、隣り相成、入事  
燒清、此は仕置、此は、同、此は、事

明和九年

世一〇 官歸、此は、大徳院、貨附合、并積土、此  
例、此は、馬舟、并、方、中、并、事

明和九年三月

世一一 此は、捕、向、拘、此は、諸、預、此は、捕、向、方、此は、被、給  
味、及、方、打、合、相、乳、此は、數、此は、事、方、此は、可、給  
此は、律、事、并、此は、方、此は、是、此は、被、給、此は、此、此、此、  
一切、不、指、上、事

明和九年七月

世一二 大坂表、貨、合、銀、入、事、方、此は、此、此、事

同治元年六月

一 向後主人某親、為日負小者人相書を在  
得云、作舟者、由書舟

明治元年十月

一 市家(押込)相成科、之の教日揚念、介書  
外、中分者、由書舟

明治七年三月

一 連年、盗人の向後、十四以上、兇犯、下書  
由書舟

明治七年十月

一 廣、盗言、其言、言十、五以上、下書、在  
一、一、舟者、由書舟

明治四年六月

一 市領、者、吟、味、筋、清、者、最、領、地、以、  
壹、方、之、候、舟、由書舟

明治八年三月

一 大目、舟、由、舟、舟、某、者、吟、味、筋、清、  
由、舟、舟、由書舟

明治八年六月

一 門、外、百、拾、五、江、區、之、候、舟、由書舟

明治八年十月

一 入、年、滿、然、者、自、留、是、不、中、吟、味、筋、清、  
由、舟、舟、由書舟

明治八年三月

一 善、候、之、情、文、書、多、多、上、之、者、外、下、  
如、其、且、候、後、文、書、其、上、之、者、舟、由書舟

明治八年六月

一 盜、物、出、亦、不、相、丸、形、之、者、之、者、舟、  
由書舟

明治九年十月

一 一、身、上、之、者、三、拜、之、後、中、舟、由書舟

明治九年三月

一 一、身、上、之、者、三、拜、之、後、中、舟、由書舟

明治九年六月

一 一、身、上、之、者、三、拜、之、後、中、舟、由書舟

明治九年九月

一 一、身、上、之、者、三、拜、之、後、中、舟、由書舟

明治九年十二月

一 一、身、上、之、者、三、拜、之、後、中、舟、由書舟

寛永六箇年十月

一 由構之地致御領地との入界増下り  
申書付

寛永六箇年十月

一 盗物出前不札入取判書等々  
御領地内者外之候何方申候  
下仕りの申書付

天明七年正月

一 所存之階之同武家之家来申仕座名目  
下仕り申書付

天明七年正月

一 物不取御領地仕座何方之候申書付

天明七年正月

一 主頼百為自負小との相果長槍御領地  
申書付

天明七年正月

一 遠藤之父の多係在成女抱御領地  
御領地内申書付

天明七年正月

一 盗取料申仕座御領地御領地  
御領地内申書付

天明七年正月

一 王権之御領地御領地  
御領地内申書付

天明七年正月

一 御領地御領地御領地  
御領地内申書付

天明七年正月

一 御領地御領地御領地  
御領地内申書付

天明七年正月

一 御領地御領地御領地  
御領地内申書付

天明七年正月

一 懐胎之女系罪不長竹申書付

天明七年正月

一 毎月公事終味御領地御領地御領地  
以上御領地御領地御領地御領地  
御領地御領地御領地御領地御領地

天明七年正月

一 武家之家来御領地御領地御領地

天明七年正月



一 命張文入裁洋、限相改、以倭、以書、  
文化二十二年五月

一 倭、方不、忘、貨、在、出、谷、之、倭、以、書、  
文化二十二年五月

一 評、定、不、可、自、言、合、選、最、利、派、其、外、也、傳、之、倭、以、書、  
市書取  
文化二十二年五月

一 傳、是、國、附、大、傍、下、流、人、若、是、方、最、名、以、書、  
文化二十二年五月

一 入、民、為、捕、市、任、運、何、果、事、  
文化二十二年五月

一 盜、之、以、以、誰、標、夕、明、之、知、中、陳、不、於、白、快、小、  
以、其、誰、接、於、為、對、向、通、是、罪、在、倭、以、書、  
以、未、不、能、者、之、以、書、  
文化二十二年五月

一 曉、疎、傳、出、不、持、傳、小、葉、種、不、黃、樹、之、倭、  
中山、士、預、之、意、以、倭、長、傳、表、外、他、也、  
旁、出、以、倭、輕、倭、代、不、倭、方、之、而、之、不、相、  
成、事、細、之、經、市、甚、重、也、乃、上、倭、各、以、書、  
文化二十二年五月

一 唐、物、接、荷、之、倭、以、書、  
文化二十二年五月

一 催、者、之、事、之、人、之、起、以、遠、以、倭、以、書、  
文化二十二年五月

一 吟、味、成、其、中、家、之、家、來、主、人、不、預、之、以、倭、  
方、之、倭、以、書、  
文化二十二年五月

元文六甲午年  
三奉仍

一 村方名を以下に者只今迄方々申付候  
自今以後方々相止候候に比中重事並  
又各々組立候事假使取上候事上  
う格之の道程申付事

在申事と侍候事との事大なる  
申付事

在る道の無相之は且町邊村方所奉仍  
支配申付事今迄方々申付可  
申付候に申候事社門恭之候と右  
申付事

一 公事扱形申付事日教事向後可限  
廿日但遠國事合以申付候事日教事  
具書之日限相極事

甲巳月

寛保三庚午年正月八日  
三奉の旨

一 向後老中若年寄支那之令限若令  
後預出傳令其預中向之旨  
三奉の旨  
重預中向中算小管日旨  
可傳真旨

十月

寛保元庚午年二月廿

麹町拾三町目佐藤屋

長三傳傳

重預放平外者

次重傳方之旨

中重放

中重放

為事

右之通法仕置中分同重之世敷之仕任  
並右之旨之旨同旨

十月

寛保三庚午年二月九日伯耆守及藤原守及後出守等  
伯耆守及藤原守及後出守等  
伯耆守及藤原守及後出守等  
伯耆守及藤原守及後出守等

但寛保三庚午年二月九日伯耆守及藤原守及後出守等  
伯耆守及藤原守及後出守等  
伯耆守及藤原守及後出守等  
伯耆守及藤原守及後出守等

三奉の旨

一 物を盗取り不限多少械徒

一 一家之内に盗取物有り捕りて悉令之旨

一 差別械徒同旨

一 惣之中を路行者械徒同旨

一 町方築物より外に物を盗取者械徒同旨

一 右名盗械徒一為是罪之事

一 中者切

一 路行者用僧を出入込小者

一 腰袋杖袋を扱ふ小者

一 右何者之為入罪之刑事

但入罪之旨の刑事名お上り捕りて是罪

右之通法仕置



中身直り申入事な致し者も多有し原簿  
より身之致去年不中身直防者も可有  
市簿より申入事

世原の致去年不はれ、市簿直り  
共の直り又の致し者も可有し  
市簿直り申入事  
中身直り申入事な致し者も多有し原簿  
より身之致去年不中身直防者も可有  
市簿より申入事

市簿直り申入事な致し者も多有し原簿  
より身之致去年不中身直防者も可有  
市簿より申入事

三月

此書は外六月十日  
相模

七  
重平坊役人へ家来市仕置之儀  
具主人の御指之候事以上以上書付

書付は附札之通相也候事  
此書は外六月十日  
大田

大田  
徳田  
神心志願也

重平坊役人へ家来市仕置中書付之儀

公儀市仕置之儀 御付之儀其主人の御指相候事

候事市仕置中書付之儀

以原儀是候申上候事

公儀市仕置之儀より申上候事其主人の御指相候事

申上候事但信分以上申上候事其主人の御指相候事

候事申上候事其主人の御指相候事

申上候事其主人の御指相候事

六月

青森市附札

此書は外六月十日  
申上候事其主人の御指相候事

青森市附札

新目付

大坂市附札

若年寄

市側尻

寺社奉納

大目付

町奉行

市勤事奉納

市目付

大坂市附札

渡海湯城介  
遠國奉修

右其新た方て家来思事仕内仕置  
子成小貴

管官日永年三月廿一日

相模守 相模守 相模守

三奉仍

八 由家内家来入るる病方負療治代家  
外由仕置相成るるもの向度向方并申  
出取三奉仍

三月

管官日永年三月廿一日

相模守

九 白戸井由仕置るる病方負療治代家  
子成小貴や相成るるもの向度向方并

由仕置相成るる病方負療治代家  
支那揚州の捕ら地の中身事

右の病方負療治代家

管官日永年三月廿一日

相模守

三奉仍

十 由家内家来入るる病方負療治代家  
子成小貴や相成るるもの向度向方并

由仕置相成るる病方負療治代家

右の病方負療治代家

由仕置相成るる病方負療治代家

由仕置相成るる病方負療治代家

由仕置相成るる病方負療治代家

三奉仍

十一 由家内家来入るる病方負療治代家  
子成小貴や相成るるもの向度向方并

上月

寛政三十年六月廿一日

十二 庄は庄廻伺之上、下知相冊は甚汚定書、遠く候有り、何れも老老之意、上旨在、此は是乃於羽目、同三尋、乃不獲、主行渡、

一 庄廻丹後、其旨、亦、此は庄、下、志、其、何、不、中、候、内、庄、定、書、の、引、合、迄、事、有、り、り、下、中、上、旨、交、行、候、り、

年八月十二日

寛政三十年六月廿一日

三奉仍也

十三 公事、此、何、異、情、願、事、信、渡、其、旨、何、日、教、相、冊、有、り、下、及、因、野、事、年、

之、の、爲、免、亦、其、相、成、何、家、後、ハ、裁、得、奉、

先、下、子、相、冊、ハ、亦、此、時、有、り、候、希、一、時、味、

事、中、若、者、自、下、而、早、一、候、勿、痛、ハ、事、ハ、

三、接、候、有、り、格、別、ハ、何、大、ハ、此、時、ハ、

不、中、日、教、ハ、相、冊、何、の、事、也、

右、之、廻、の、事、ハ、其、旨、且、之、書、圖、奉、行、大、付、

盜、賊、後、ハ、其、旨、有、り、候、事、ハ、

寛政三十年六月廿一日

寛政三十年六月廿一日

三奉仍也

十四 公事、此、何、異、情、願、事、

一 為、儀、事、

右、六月、此、相、冊、有、り、何、及、不、相、得、有、り、何、推、測、ハ、其、旨、何、中、ハ、其、旨、

事付三卷... 山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右... 山前... 山後... 山左... 山右... 山前... 山後... 山左... 山右...

自備令出入... 九月

九月

寛政二十年十月十日

相模... 山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

十六 山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

中後... 山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

備... 山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

寛政二十年十月十日... 山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

十六 山陰... 山陽... 山前... 山後... 山左... 山右...

右之通法攝事清海者又因承之任信  
桐伺小者以今迄之通名亦一所  
下中

寶曆三年六月廿七日  
右通法攝事  
三奉仍白

十七女法は遣重連放之申付申定付日今迄  
重連放之申付小所人百指之文重連  
放之申付小所相障候も言事申方  
向後所人百指之文重連放之申付  
取之致小

右之通法攝事清海者又因承之任信  
十月

寶曆三年六月廿七日  
右通法攝事

三奉仍白

十八父之科者其子遠信也 仰付捨之儀  
外親類也預之同其信 仰是生家  
又命是遠信也信事之故之取國者  
一軍也遠信也遠信也遠信也遠信也  
遠信也遠信也遠信也遠信也

寶曆三年六月廿七日  
右通法攝事  
三奉仍白

十九向後所人其妻或申入之傳也 為其有之  
有之申入主人 為其有之其信也遠信也  
同外賜之上條之取申付  
右之通法攝事清海者又因承之任信

十月

寶曆六年壬午閏五月廿六日

相傳書

三奉修

二十相の理なきは任方なきは事切難し  
との或は怪我も風舟を弄す母を  
死に若吟味の上三妙は塔の中張成り清定  
の右より入る相成りのを冬冬は成り  
はる向後け敷く山は正相何れ言致

寶曆八年六月廿一日

左馬頭兼左衛門尉藤原朝臣

三奉修

廿一公事相伝は諸頼事詮成事甚目者  
及日教相傳も有り下り及困窮芝草  
之共は病老中茂多相成り河成候は裁  
海峯若者早相傳も吟味下有るは

前吟味事子々取申中候勿希事  
三授伝有る共格別吟味は事取申日教  
不相成候は初者先事と相違申通今  
相違申有るは事嘉も相違申通三授伝  
有る相違候は初方事と相違申事  
之相成り候は伝事相違り有る  
吟味事は事取申中候勿希事  
度は事作事は表意永候  
御代は事作事は相違候は事取申  
御事相違事合事申中候是事其相違事  
三授伝事有るは事取申中候是事  
御代其教事取申中候相違候は事取申  
事三授伝事有るは事取申中候是事  
其相違候は事取申中候是事其相違

但やき道程を不之く為敷以て多し不可悉  
事し旨也 行意有之事は此の如く  
右の如く有之事は此の如く  
小儀に有之事は此の如く  
事合ふ事は此の如く  
今諸事且詳談中候し事し  
自意に日教相御の如く  
右の如く有之事は此の如く  
形又落く多切以候し勿論三府吟候し  
浅き候し事由以候し不可相成候し  
左の如く有之事は此の如く  
兼自今之意候し事し旨也 信也  
以上

九月

寶曆八年九月廿日  
右近衛守藤原公成

三奉候

世一向後法皇御相向長治天皇相向御出仕  
能く少く黄茂由候し通候事有之事  
加可事多也  
右の如く有之事は此の如く

九月

寶曆八年九月廿日  
相模守藤原公成

三奉候

世一向後法皇御相向長治天皇相向御出仕  
相尋其後落候事有之事  
自今之意初詳談中候し事し旨也  
事合ふ事は此の如く







重小のし有るは有る味不交たる候  
有るは其内を辨る味相得終  
門合を答ふ名終候し有るは候し以來  
公事の時事六月ありり例の通  
相得を後相得交り六月及りり  
何れ味を何候し味相得候  
下候し味答ふ名仕り候事言  
外右の通りり味答ふ名  
答ふ仕り候し候事言  
万違候し相得候し味相得  
味候勿端事

四月

寶曆十二年

右通相得候

廿八 先達相得公事候時事六月月りり  
例の通相得候後味答ふ六月月りり及  
りり何れ味答ふ名仕り候事言  
是候六月以上相得候時又六月月りり  
右候六月以上相得候事言  
以後六月公事候時味答ふ名  
別候味答ふ名

寶曆十二年

但事

三奉り

廿九 盜揚り存在者不中凡重名他人  
物重名は其貨名不念候事言  
貨名買取し其貨名他人借し  
以來貸付人多く候事言  
借し身は借付人より  
借し他人借し

右ノ類ニ其ノ類

以月

實曆三十一年十月

但

三奉

十市仕直相向ハ長所定ニ相向ルハ仕直

其ノ由ニ有ルハ仕直ハ仕直ニ略有

ルハ類例ニ公ニ相向ルハ有ルハ仕直

同ニ有ルハ仕直ハ同ニ相向ルハ依

テ仕直ニ相出ルハ有ルハ有ルハ仕直

ハ仕直ハ略有ルハ例ニ公ニ相向ルハ

ハ有ルハ仕直ハ相向ルハ有ルハ

ハ有ルハ仕直ハ相向ルハ有ルハ

十月

實曆三十一年十月

何

詳定

上 德國農事村長定ノ同國農田村長

人發生ノ件ハ仕直同業ニ依リ

味書ニ依リテ双方共ニ人殺スルハ

公法ニ依リテ村方共ニ言子ニ依

リテ言子ニ依リテ言子ニ依

テ言子ニ依リテ言子ニ依

テ言子ニ依リテ言子ニ依

テ言子ニ依リテ言子ニ依

テ言子ニ依リテ言子ニ依

テ言子ニ依リテ言子ニ依

テ言子ニ依リテ言子ニ依

得て安んずる後俊夫連と勝手合て有る事  
此後未だ情事なきもの程又仕路者も有る  
事ハ糸屋等右等様ニ相成博覧

六月

實録 三奉仍也

右邊北邊及大物

三奉仍也

世 武家之家來貨通帳亦秋大負者貨物  
不取とも不札貨通帳に記入し古成り外  
右債物外失為り時答へ後長延通帳有る  
此向後付取入る由取又取らざる別  
市家と通帳下冊に申す中分

但貨通帳亦取取り正すに申入る

不中算右取取に能入判事用以致

貸入小敷に下取集束したる一書

右指通の貸入合の帳に下取不存候分

冊取に只今無通意候に申す

書

右通帳公傳

七月

實録 三奉仍也

右邊北邊及大物

世 武家之家來貨通帳亦秋大負者貨物

取取り正すに申入る

不中算右取取に能入判事用以致

貸入小敷に下取集束したる一書

右指通の貸入合の帳に下取不存候分

冊取に只今無通意候に申す

書

右通帳公傳



御借入の御事申上  
 別借の預出の御事申上  
 五月の御事申上  
 六月の御事申上  
 七月の御事申上  
 八月の御事申上  
 九月の御事申上  
 十月の御事申上  
 十一月の御事申上  
 十二月の御事申上

申上月

申上月  
 御借入の御事申上  
 別借の預出の御事申上  
 五月の御事申上  
 六月の御事申上  
 七月の御事申上  
 八月の御事申上  
 九月の御事申上  
 十月の御事申上  
 十一月の御事申上  
 十二月の御事申上

申上月  
 御借入の御事申上  
 別借の預出の御事申上  
 五月の御事申上  
 六月の御事申上  
 七月の御事申上  
 八月の御事申上  
 九月の御事申上  
 十月の御事申上  
 十一月の御事申上  
 十二月の御事申上

御借入の御事申上  
 別借の預出の御事申上  
 五月の御事申上  
 六月の御事申上  
 七月の御事申上  
 八月の御事申上  
 九月の御事申上  
 十月の御事申上  
 十一月の御事申上  
 十二月の御事申上

御借入の御事申上  
 別借の預出の御事申上  
 五月の御事申上  
 六月の御事申上  
 七月の御事申上  
 八月の御事申上  
 九月の御事申上  
 十月の御事申上  
 十一月の御事申上  
 十二月の御事申上

御借入の御事申上

兼傳亦合限納并先仍納付代價而納之  
候ハ勿論然レ市橋自向口指ルハ法然也  
亦吟味及方々合相札取ルハ公事方ハ甚  
奇ルハ後吟味事ハ取直事ヲ用水端出端  
ホモ市料亦加ルル候モ市橋自方ヨリ吟味  
シルハ取相算外取直事ハ公事方ハ取直事  
前ノ事トシテ市代受付取直事トシテ兼傳  
ニ候合限取直納并一俣先仍納付代價別  
取直又モ諸運上類ノ類取直事トシ吟味  
一其内ニ若シカ入及方亦合相札取ル  
市橋自方ハ引渡公事方ヨリ取直吟味ハ  
市代方ヨリ吟味之上存行ホモ多量カ入勿論  
預納事トシカ入ニ事ハ公事方ヨリ吟味  
有レ事ハ

一取直所ニ候モ其支取付代價ニ差支事出  
市代ニ懸差取直上中取直候ハ取直事ハ橋自方  
ヨリ取直相札取ル有レ市代百程差支目然モ其支  
取直ハ代價ニ不届諸事候ハ亦相合傳ル  
奇ル事トシテ市代吟味ヲ押返相納ル事ハ  
取直所ニ候モ其支取付代價ニ差支事出  
市代ニ懸差取直上中取直候ハ取直事ハ橋自方  
ヨリ取直相札取ル有レ市代百程差支目然モ其支  
取直ハ代價ニ不届諸事候ハ亦相合傳ル  
奇ル事トシテ市代吟味ヲ押返相納ル事ハ

三月

明治三十二年七月十日

田中 清

三奉 仰

廿七 大坂表賃金銀ノ入申事方々候モ其ノ地  
賃金銀申事方々ノ通傳用事ハ其ノ十日限事

中後右日限不相辨ハリノ意趣一切中付在  
先所後所ノ意趣別發口事ト右ノ通斗ハ格  
又ハ妻細ク後ハ何處ハ是命トハ相違ハリ可也  
傳其意ハ

七月

明和八年六月廿日

周防守 大津藩 中津藩

三奉仰

世ハ向後主人ノ義ノ為ニ有ル者ハ傍不相辨ハリノ相  
事を尋ニテ 原付ヨリテ是レ中津藩ノ義事ト為事  
ハ取立然事

五月

冊書身例事組ハ博士一併付書ト為ル故  
其旨向事任是ル如向ノ事ハ當ニ向事  
既ハ海ノ中ニ通ル事ハ相問ハレテ月也  
其年十月松平伴信吉宛書テ是旨教付大陽  
安考彈安羽今伴敬則集皆也

明和八年五月十日

右近衛監房 大津藩 中津藩  
但所奉ハ高直年也 取立

三奉仰

世九湯家人押込ニ相成ル科ノ事ノ教日揚至入書  
此身各々付ハ傳書令有是各々ハ沙法ニ及有  
中後所ノ有ル之其意別各々付ル有之區ハ  
向後所家人ノ事ハ教日揚至入書ニ其意別  
各々付ル方ニ是各々付ル有之區ハ

十月

明和八年四月廿日

依傳書身 大津藩 中津藩

三奉仰

四十日仕置信書事ハ同旨ニ有之取立然事

年十歳以上死罪を有る途中之盗罪を有るは  
之に向後途中之盗之十歳以上を死罪と相定  
ル候事抄下

明和七年六月十日

右京太左衛門 大納言 市邊  
御中

三奉仰

四十一市仕置の定書より先有る所盗罪より除  
き除後以上死罪を有る者ハ盗罪十歳以上  
相候ハ死罪より逃之沙汰盗罪其後盗罪不取者  
中ハ得共又ハ此盗より以上盗相止候候味  
之上世傳族等ハ盗之盗罪ハ不取令旨  
拾遺以上相候ハ之ハ死罪相定申上候  
事抄下

六月

明和七年六月十日

右京太左衛門 大納言 市邊  
御中

三奉仰

四十二取領より先有る所盗罪より除  
き近頃土地ハ通達等より得共方ハ不取候  
事候ハ第一有る所及杯の取候ハ其事之致  
成ル方ハ取領土地ハ通達有る候事抄下  
右京太左衛門 大納言 市邊  
御中

九月

明和八年四月廿九日

周防守 大納言 市邊  
御中

三奉仰

四十三大目付内月内三合吟候御事 深草奉旨仕置



此書各不及

一門抄の目録に或種抄指しに狼藉

る後抄佐書に山は是の題に於て

有る通句信三書信傳志山信書に可事

加小

又月

明和八年十月廿日

右道抄監者 大藏卿 山内

三奉仍日

甲入年備預之者日名多不中林陸多致也

吟味初分りて本年申分二段又皆預之吟味

分入年備預多事林三書事

十月

明和八年十月廿日

周防吉原 大藏卿 山内

評定本二書日

四十六道神奉仍相伺り奥列白川信三百捕り書信柳

形起石書二件吟味之日

橋本町三丁目

友在書山内

孫之書信

七書筆通に百連三長書信長致書信信書

出の上を不事起林一の問書信三段書信書

段々長書其上申中分並如不事書書不

坊二守道料三貫文

右の通中係出書三書事其書信三書信

一節に之の書事申分外分子細書事

朱書に准次書信申分附日取申分

直り右に吟味之始末申上子細書事

同答云々最宜例に類し中身は相違候  
右相違に類し

十月

明和九年十月十日

大御所 白河

三奉り

四十一 盗物お新不相乳形り並りとの者も後方

不相慮り物形りりる又い形り方不相慮り

互料中身生不相乳形り並り並りとの

急度呼

右通中身得向後並不相成候事傳

四月

明和九年十月十日

佐渡者 大御所 白河

評定事

四十七 於る料中身りとの月为上

相伺り候有る盗料に相伺りも有る匪に

俸下人ホる形为上

出りりとの盗料中身盗料

中身通に類し

右通に類する匪不相成候事

十月

明和九年十月十日

大御所 白河

評定事

四十八 於るはは盗料相伺り候は来通に盗料

盗相伺り多しは盗料通に相違之例に盗相伺り

盗は盗り各自遠り多しは盗り通に盗料

盗事相伺り

右通に類相伺り匪不相成候事



申事の出入事の上意を以ては申事の一程申事  
申事の有るは物に右は捕り地獄御心  
の先事に入事有るは其入事を相用ひ者  
申事より一程申事相用ひ有敷くは信  
臣に申事有るは傳り

八月

安政四年十月十日

右京大夫 大納言 右衛門 左衛門 少納言

三奉り

五十二公事御仁情願事一存議事より言さし候  
及困窮立年者病死候事多し此何れは苦  
候に格別候事なり申事有るは先年  
申事其比より六月以上候事其申事  
其後程又増え申事毎月申事  
申事以上申事より公事出入事有るは

油取に有るは申事候事今申事申事  
申事出入事候事日数候事候事  
候事候事申事其申事申事申事  
申事候事申事申事申事申事  
申事候事申事申事申事申事  
申事候事申事申事申事申事  
申事候事申事申事申事申事

十月

有申事申事申事申事申事申事申事申事  
遠失事申事申事申事申事申事申事申事

安政二年十月十日

右京大夫 大納言 右衛門 左衛門 少納言

三奉り

申事申事申事申事申事申事申事申事  
申事申事申事申事申事申事申事申事  
申事申事申事申事申事申事申事申事

相違は傳書以來に案有るもの相違は地  
の異なるに生ずる入書の際に誤り増す  
る入書の中亦有るは正しく一書ありて  
分るは何の意を辨るに非ざる相違は一書先  
入書を相増するは正しく一書ありて  
可き例なり

右の條向後不修故言を傳

三月

安永六年正月

右通相違

中世

山内

山内

山内

五十四 盜出物と不相入るを判或書する貨物と  
方誤り貨物と不相入るを存案取らざる  
候は定む不相入る候は例なき相違は  
多例と有るは故に伝書入るに  
候は例なき相違と有るは傳書

合入るは例なき相違は例なき相違なり  
候は例なき相違は例なき相違なり  
小書貨物と不相入る候は例なき相違  
料なき者却るは味書候は例なき相違  
右の多相違候は傳書一書相違は  
言の中亦有るは傳書一書相違は  
斗其天在相違候は例なき相違は  
通相違候は例なき相違は傳書  
合入るは例なき相違は例なき相違は  
一書相違候は例なき相違は傳書  
今味相違候は例なき相違は傳書  
相違候は例なき相違は傳書  
小書傳は傳書一書相違は

天明三年六月廿日

大加方屋 伊藤屋 口田屋

相替前より有る外七ヶ城

牧野豊永

牧野大隅守

兼不任意

五十五條 幸山彦小揚屋以希一件は住置生置

何處致洋儀等中軍小通相屋

一節 官書入の海舟は有市住置と藤武家

家来より名目無く間取く十条千武家

有く旧来女又合給事不審と取り小舟一舟舟兼

舟月日長武家より家来目下舟より名目忍入

相替

天明三年四月十日

牧野豊永

伊藤

口田

五十六條 船長海盜人藤長博を被遣介との由は置

船方より候門杯の障布を被方切或は因障

遣入小敷の由置の等より候事不詳は方舟家

入く市置の舟一死罪に有相成の舟舟候

候恒を考或は被障を遣入又出入相成候後

有く不詳より遣入小敷の由置の障布

一杯入置重敷と幸年山崎屋に有る障

布置置りし市置の舟一死罪に有る幸年

其置の始末より考候重く相成候由

有る敷の由置の始末より相成候由是合

家置置りし市置の舟一死罪に有る市置

三准置より十候其置の始末より相成候

相替

天明三年五月十日

牧野豊永

伊藤

口田

相替



要約たは中流の訪友の通

上流の流罪を以て階級を以て成る事

上流の類は通に於て階級を以て成る事

相成り候は市井者より成る事

階級は其の階級を以て成る事

階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

出流の上中流の階級を以て成る事

下流の階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

但し其の階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

有る階級の階級

九月

寛政元年九月廿日

松平定信

卒九公事裁許且外仕任事し事に入らば休戚

り候事と云々天下邪心初懲り候事風俗

を以て懲り候事日本の上り事たる事者

別々の事と云々此の階級を以て成る事

行出候事其の階級を以て成る事

行出候事其の階級を以て成る事

一天下の仕仕階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

事の上事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事

一階級の階級は其の階級を以て成る事







此有補遺の仕事候罪に十分分は是迄の仕事  
より二等と重く十分別紙制札の送付地一同  
の傳の上を前原の通り仕置る事なり

酉三月

右の通書傍事の内中後者三條其意制札  
の儀に長傷奉り候旨を詳書奉り置候  
事の内七条を平

同  
中長備木の水野

制札案

定

扱前密書と重く制札十分分は是迄の仕事  
候旨を詳書奉り置候事

一 右の通書内令限嗣後各扱前密書  
より一考其旨を詳書奉り置候事  
死罪事

一 密書單干絶絶希と申候旨右の内  
扱前密書内令限嗣後各扱前密書  
事一考其旨を詳書奉り置候事

右の通書内令限嗣後各扱前密書十分分  
候旨を詳書奉り置候事  
不備候中後者三條令教諭候旨制札  
候旨相違の也

月

右の通書内令限嗣後各扱前密書十分分  
候旨を詳書奉り置候事

年月日

奉り

寛政

丹波

詳書奉り置候事

詳書奉り置候事  
長相候旨を詳書奉り置候事

二月

寛政三戊午二月廿日

御中

拜啓

一 寄場入目録は仕度中身は候

一 盗りし者有罪

一 仕度加減は候し候者同列

一 寄場迄去り候同列

一 寄場惣括要録は候者同列

但し今更なるもの、其結果は、如何に候  
申上り奉事

一 職業必修又申す不測用は直修申す候

候、不乗修は、是れ、申上り候

但し、候者、その、何れ、又、更、何、候、申上り

一 皆、要、又、は、悉、巧、木、筋、は、候、申上り候

この、事、其、品、より、相、違、へ、候、申上り候

申上り

右、通、長、谷、川、平、屋、中、候、申上り候

二月

右、通、長、谷、川、平、屋、中、候、申上り候

寛政三戊午二月廿日

御中

拜啓

一 寄場入目録は仕度中身は候

一 盗りし者有罪

一 仕度加減は候し候者同列

寛政三戊午二月廿日

御中

拜啓

六十八 寄場者、不捕、川、原、門、渡、入、者、候、申上り候

人より教諭又ハ由共出テ所信惟文者善事止リ  
際一を所候人加下リ其上言出奔物ハハハ  
更人所候人ハ多限履之勢ニテ中分事成ル  
引文方實事相成テ所候方ハ善ルハ惡徒共  
中人善補ルハ引是事ハ善事為儀之一年引更  
人相成ル事ハ有之哉

寛政二戊午四月

御中書 御内書 御外書

三奉仍也

六十六 懐胎之女死産直仕申付ル候旨今違テ例區ハ  
死刑相成ル事ハ子等依父母科死刑ニ  
不及ル懐妊之女を養ハルハ胎内子科等  
トテ命を終ル事ハ内書出書後死罪  
一奉仍也

寛政三亥年三月

御中書 御内書 御外書

三奉仍也

六十七 評定不存御公事補正長三奉仍一役限ハ多限  
吟傳為中略ニテ今政事ハ毎月評定書  
若御所候候物出積吟傳事違儀及ハハ  
一奉仍也

一十二月以上不御御公事吟傳為不次書之由來

各書事ハ不及ハ

三奉仍也

公事吟傳為不六月以上不御御御書事書事  
御所ハ御書以來一通矣ニ書事ハ右ニ遠國  
奉仍火附盜賊政ノ下中通り事



汚害ノ通中舟再犯ノ故ハ家臣ノ致

一名主

汚害ノ通中舟再犯ノ故ハ家臣ノ致

一地主

汚害ノ通中舟再犯ノ故ハ家臣ノ致  
此上地代店賃名相納ノ事ニ付テハ元地  
二返下家代取掛火除地ニ相成場所ノ  
故テ其處ノ伺上ニ事ナリ

一重土地面賃負人

賃負ノ取込料十貫又再犯ノ故ハ家臣ノ  
上ノ戸掛

有ク通中舟再犯ノ故ハ家臣ノ致  
事ニ付テハ元地代店賃名相納ノ事ニ付テハ元地  
二返下家代取掛火除地ニ相成場所ノ  
故テ其處ノ伺上ニ事ナリ

二月

三四月七日

宋女ノ身  
後略者  
公作  
元地  
元地

三奉例

七千 初ニ由任置ノ故ハ事更相成ノ事ニ付テハ元地  
ノ勿希ノ故ハ事更相成ノ事ニ付テハ元地  
を明ク又ハ事更相成ノ事ニ付テハ元地  
入ノ故ハ事更相成ノ事ニ付テハ元地  
而を盗キハ事更相成ノ事ニ付テハ元地  
拍ノ是更相成ノ事ニ付テハ元地  
段ハ事更相成ノ事ニ付テハ元地  
メリを明入ノ盗入ノ事ニ付テハ元地  
具次由任置ノ事ニ付テハ元地  
ノ有無ノ拍ノ由任置ノ事ニ付テハ元地  
由任置ノ事ニ付テハ元地  
知悉ノ事ニ付テハ元地

心得りて得る事は日録を思ふ事候  
しつて文前引の事候か事候候  
形せしむ事候事候事候事候事候  
候に事候事候事候事候事候事候  
左考の事候事候事候事候事候事候  
候候候候候候候候候候候候候候  
候候候候候候候候候候候候候候  
別候相違の事候事候事候事候事候  
有無の事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候

七十二 福不苦有る長地改差事候以茶の邊迄

元泉寺土着の 長地手候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候

此如山東度候事候事候事候事候  
失ひ候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
裁件有る事候事候事候事候事候  
差事候事候事候事候事候事候  
地改不差事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候

一吟味候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候  
事候事候事候事候事候事候事候

寛政八年己未十月五日

宋女公殿 右平左  
飛書

七十二 祥信承之候、予内堪亦か、汚威老、  
事、以候、各謹候、予相勤候、勿漏、  
其近來何と云く相あり、み裁、  
性たとも有之、相、  
以り相、  
公傳、

寛政六年辛酉二月十六日

宋女公殿 右平左  
飛書

三奉

予三 播要仕任、  
播要、  
播要、  
播要、  
播要、

但、  
同者、  
早、  
右、  
公傳、  
三月

寛政六年辛酉六月廿七日

宋女公殿 右平左  
飛書

是

七十四 在方播要、  
播要仕任、  
今、

宋女公殿 右平左  
飛書

宋女公殿 右平左  
飛書

市島





昔々端々海軍之事、向々此迄、公使置  
 置、外屏依、予、重、船、等、の、  
 相、得、出、給、事、是、候、は、若、是、亦、一、種、の、  
 相、得、の、事、は、法、一、指、子、方、出、給、一、十、百、  
 直、中、層、上、重、重、の、事、は、亦、一、種、の、  
 之、の、有、り、と、申、入、の、事、中、其、事、の、  
 考、科、一、言、は、小、且、有、而、國、外、の、事、亦、  
 勿、論、之、候、故、何、家、の、事、亦、一、種、の、  
 被、召、費、は、万、一、中、は、少、し、者、其、事、  
 奉、行、亦、非、市、代、信、又、は、然、事、地、政、の、  
 有、り、通、市、料、の、代、費、相、得、の、事、亦、  
 一、種、の、  
 有、り、給、一、種、相、得、  
 八月

寛政七年九月

三奉仍日

七十九 武家、古仕、昔、要、由、仕、置、  
 本、  
 哲、了、内、是、  
 差、別、  
 寛政、  
 事、係、  
 樂、人、  
 八、十、  
 所、  
 十、  
 中、  
 所、

八、十、  
 所、  
 十、  
 中、  
 所、



但一旦入罪故、相侵後又入逃去ルノ死罪  
附考博、差直内ノ公庭改ノ上リ人有り  
同條ニ差ス

一考博侵先入逃去ルノ死罪  
合言難知  
考直以上

合言難知  
考直以上  
入罪重致

但一旦入罪重致、相侵後又入逃去ルノ死罪  
附右同以

一考博侵先入逃去ルノ重致  
但右同以

一考博逃去盜殺ル者 死罪

一考博盗殺ル上ニ逃去ル  
地内内、逃去ルノ  
死罪

一考博盗殺ル者  
合言難知  
格直以上  
死罪

合言難知  
格直以上  
入罪重致

但一旦入罪故、相侵後又入盗去ルノ死罪  
附考博、差直内ノ公庭改ノ上リ人有り  
同條ニ差ス

一考博逃去ニテ地内内  
逃去ルノ  
重致

但罪難、存立ル地内内、差直内、入罪  
同條ニ差ス

一考博逃去ルノ自ラ  
立取ルノ  
逃去ル費用を被ルル  
入罪重致  
死

一考博逃去ルノ命  
後考博、差直内ノ公庭改ノ上リ人有り  
同條ニ差ス  
二十日  
白致

一考博逃去ルノ命  
二十日  
白致

一預ル上、生於夜ニ入存後者  
二十日  
白致

但右條、考直内ノ公庭改ノ上リ人有り  
不及也

各領取手ノ管領別  
番端ノ者

一 終身持地者

其外  
重致

但之終身以上ノ持地ノ者ハ其ノ終身ノ  
持地ノ者ニシテ重致

一 終身持地者

相領ノ者ハ  
其ノ持地ノ者  
ノ持地ノ者ニシテ

一 職業者

三十日ノ日課  
百日ノ日課  
多致

一 位階ノ者

一 格ノ者

一 家ノ者

一 持地ノ者

三浦小治郎は其の父の如く仕来り通洛中  
洛外神代より傳書友の如く傳書友の店仕  
是れ外重の蔵出若一國不及致先例の通  
造釋中分り事

右の外重の蔵出奉り伺へ通中後小借付  
事終り傳書友は仕置の儀に傳書友の蔵一可  
事相合傳り事

寛政九己未九月十日

新馬場 右傳書 右傳書

三奉り

是

十二定享之子年出来合限より有る事  
同三定享相違り己未十年來進の合限より  
致多限より元來人の相違り上り借付の儀  
十卷上裁評の儀不及事の事是れ今裁評

の事申す自今出解の事吟味の上取上り事  
付り左邊の諸職人伝解の事借付の儀  
同の事

但只今並取上裁評日限より有る事  
海方尚ほ有る事是れ裁評の事

一合限借付の儀は事古儀より相違り其意  
を以て意解の儀は容易に出解裁評の事  
不及事にては取通解方の借付の事其意  
多しは狭り出解の儀は風俗不異は裁評  
の限相取れ今且借令限事指し可致  
右と傳り右の事指し後事にては又候事  
を企出入の事の儀は利他を指し不指し  
出解の難い吟味の上取上裁評の事  
一取上解方の事分り中取上裁評の事其意  
不取上り外の上意度不及候事



八七 伴屋本成の合用御次第是敷勿論

大概平常退教の制限を極度にする有るが前

に存し外子へ掛りく重なるに候方なき事

振合不度意請用向の事有御條條の詳は後

有る候に候へば御取立有候事候に候に候

退教も有る候に候に候に候に候に候に候

候に候に候に候に候に候に候に候に候



陽之候長官の手巻草紙は同入方仕置  
 中分は右ノ極ノ有リ候由付仕置ナ  
 付中分ナ付事ナリトナ付ハ候存付所  
 ナ付ハ傳旨仕置事先例ナキ相分ナ付ハ  
 候付向後ノ候日南ノ如ク同候ニ候  
 相分治候再臨末次方仕置先例ナキ見合  
 ナ付ハ候一仕置存付且事候ニ由テ手巻草  
 紙ノ初ノ一簿簿止候者是迄ノ通ナリ  
 之ノモテ元罪具外重料ナ付其外ノ業ホ  
 之程ニ決リトノ由テ夫ノ存付中分ノ中  
 重料ノ事又事又ノ有付所又事又ノ候  
 仕置事ニ候事ハ相分仕置事候事候ハ  
 以上

甲三月  
 小田切末佐  
 根名肥者

寛政三年六月十日

東海關所  
 古伏見  
 下野

書面所奉付ノ事作廢  
 相分傳旨事作廢  
 申六月十日  
 寺社奉行  
 小田切末佐  
 根名肥者

書場仕置附

書面伺ノ通以未仕置  
 申六月十日  
 小田切末佐  
 根名肥者

田邊候ノ又ノ事候外事候

但一陰候為ニ由テ重致  
 構外ノ仕置仕置  
 但一陰候為ニ由テ重致  
 但一陰候為ニ由テ重致

右ノ事及リ  
 但一陰候為ニ由テ重致











得真意外事

水戸殿 佛城附

水戸殿之市家来太保十次市合子盛  
取小件吟味相傳小舟舟作立小通  
十次市候テ荒尾但馬守方々吟味有  
者ノ事ニ付 公候仕置ノ通中舟  
ニ云候

右ノ通中上小妻浦ニ候ハ但馬守ノ一妻合

二月

荒尾但馬守

水戸殿之家来太保十次市合子盛取小件  
吟味相傳小舟相傳此取防者水戸殿  
舟停年ハ方々其方方々吟味有者  
事ニ付 公候仕置ノ通中舟ニ云候

妻細ニ候ハ其方々妻合此 佛城附

者。相傳山百十次市ハ引渡仕置テ候

別紙書付ノ通中候事候也此ニ書

二月

別紙

死罪

太保十次市

